

松尾大社における 市杵嶋姫命の鎮座について

主に秦氏の渡来と葛野坐月読神社・木嶋坐天照御魂神社の創祀に関連して

On the Enshrinement of Ichikishimahime-no-mikoto in
the Matsuo Shrine

北條勝貴

はじめに

- ①「筑紫胸肩坐中部大神」の比定と松尾鎮座伝承の検討
- ② 松尾社周辺の玄界灘に由来する神社について
- ③ 山背国葛野郡への渡来人・海人系氏族の移住と定着
- ④ 市杵嶋姫命の分祀とその主体について

おわりに

【論文要旨】

古代最大の規模を有する氏族の1つである秦氏については、現在、各集団における在地的特徴・個性的性格の解明が要請されている。そのための方法として、氏族の有する歴史性——文化全般の蓄積が顕著に反映される、種々の氏神に対する信仰形態の検討が重要視される。

山背国葛野郡を本拠とする秦氏の集団は、古来同氏族の族長的地位を保持してきた。その勢力範囲には幾つかの神社が存在するが、中でも松尾大社は隣接する愛宕郡の賀茂社に並ぶ巨大勢力を築いており、その創祀や信仰の展開には注意を要する。同社の祭神には2柱あり、大山咋神と市杵嶋姫命という男女の神とされている。前者は秦氏渡来以前より同地に奉祀されていた農業神らしいが、後者は筑前国宗像郡に鎮座する胸肩君の氏神——宗像三女神の1神で、元来沖ノ島にあって渡来人や海人集団から特別な崇拝を受けた海洋神であった。松尾大社の周辺に立地する葛野坐月読神社や木嶋坐天照御魂神社も、それぞれ玄界灘に由来し、海人系の吉岐氏・対馬氏によって奉祀されていた神格である。その分祀は、渡来人や海人集団の移動に伴うものと考えざるをえない。

海岸部から内陸部へ、北九州地域から畿内諸国への海人集団の東遷は、考古学的にもある程度立証されている。それは彼らの主体的行動に基づく場合もあるが、多く5世紀後半以降は、半島との交通権・制海権を掌握・独占しようとするヤマト王権によって促進された。半島よりの秦氏の渡来も、そのような社会状況を背景に移動と停留を繰り返しつつ、海人集団との繋がりを持って行われたものと推測される。

松尾大社に鎮座する市杵嶋姫命も、胸肩氏と血縁的・文化的に接触した秦氏の1集団により、玄界灘より分祀されてきたものと想定される。元来松尾山には大山咋神と一対の普遍的な女神（神霊の依代たるタマヨリヒメ）が祀られており、市杵嶋姫命はその神格に重複し限定を加える形で鎮座したものであろう。